

# シノドスへの歩み みことばと共に 復活節第五主 復活節第五主日C年

小西広志

2022年5月15日

## はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年5月15日、復活節第5主日となっています。今日の三つの朗読の箇所をシノドスの教会の観点から読んで味わってみましょう。

## カづけ、とどまるよう、励ました

第一朗読の冒頭に注目してください。「その日、パウロとバルナバは、テルベからリストラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返しながらか、弟子たちをカづけ、「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」と言っ、信仰に踏みとどまるように励ました」（使14章21b-22節）。

この21節と22節はギリシア語の原文を見ると一続きの文章だそうです。全体を支配する動詞（主動詞）は「引き返した」で、「カづけ」（エピステーリゾウ：いっそう強固にする、カづける）、「とどまるよう」（エンメノー：堅くとどまる、堅く守る、守り通す、貫徹する）、「励ます」（パラカレオー）はすべて分詞、あるいは不定詞のとなっています。

つまり、パウロとバルナバは弟子たちの心をカづけ、信仰にしっかりととどまるようにと励まし勧めながら、これまで通ってきた道と同じ道を引き返すのです。パウロもバルナバも信仰を生きるには多くの苦しみが伴うことに気づいていました。そして苦しみを受け取るとはイエス・キリストの苦しみと一体になることであると確信していました。

そんな彼らは、神の言葉を聞いて信仰に入った新しい信者たち、すなわち「主の弟子たち」となった人々へのいわば洗礼後のフォローアップを道を引き返す途中でやっているのです。

## 新しい天と地、新しいエルサレム、神が人と共に住み

第二朗読では冒頭の「新しい天と地」（黙21章1節）にこころを向けてください。「最初の天と最初の地」とは現世を指し、去るべきものです。朗読箇所の前の20章には「千年の間キリストと共に統治する」する時

代がやってきますとあります（20章1、6節参照）。そして、その千年が終わるとサタン、悪魔が焼き尽くされ、最後の裁きがなされます（20章7、15節参照）。その後「新しい天と新しい地」が現れます。「もはや海もなくなった」（21章1節）の「海」は竜の住処であり、悪の象徴となります。

ここでの「新しい」はギリシア語原文ではカイノスです。まだ使われていないという意味での新しさ（例：マタ9章17節、ルカ5章3節）であり、同時にこれまで存在しなかったという意味での新しさの意味もあります。

2節にある「新しいエルサレム」とは着飾った花嫁のように準備されて、降ってくる新しい都のことです。そして、新しいエルサレムが新しい天と新しい地を融合させます。ここが新しい創造の中心となるのです。なります。3節の「神が人と共に住み」も印象的な表現です。新しいエルサレムは神と人との永遠の住まいとなるのです。そこでは人は神の栄光に与ることになるのです。もはや死も苦しみもありません。

## 栄光を受けた、栄光をお与えになる

31節と32節にある「栄光を受けた」、「栄光をお与えになる」はどちらもギリシア語ではドクサゾーと言うそうです。栄光を表すドクサの動詞形です。ドクサには輝きという意味がもともとあります。その動詞形です。第一の意味として「人々がある人に抱く味方に影響を与え、その人の評判を高める」、すなわち「ほめたたえる」があります（例：マタ5章16節参照）。次に「光彩を放つ、偉大さをもたせる、輝きを着せる」の意味もあるそうです。イエスさまは神によって「輝きを着せられ」、神さまはイエスによって「輝きを着せられる」のです。つまり、子であるイエスさまと父である神さまの間には「栄光」が行き交うのです。イエスさまは父の栄光のために地上で行動し、父はイエスさまから栄光を受けるのです。

## まとめ

第一朗読の22節にある「多くの苦しみを経なくては」に注目してください。パウロの信仰の理解には、イエス・キリストとの一致、特に苦しみを共にすることがあるのです。また23節にある「任せた」は印象的な表現となります。パウロたちは福音を伝えます。しかし、パウロは信徒たちを自分の方に向かわせることはありません。神の方へと向かわせて「その信ずる主に任せた」のです。パウロたちはあくまでも福音を語る人であって、信仰を仕上げてくれるのは神さまご自身なのです。同じ視点から26節にある「神の恵みにゆだねられて」も味わえます。神さまの恵みが伝道旅行の間、ずっと寄り添っていたのです。ですからパウロが成し遂げたのではなく、神さまによって成し遂げられた宣教旅行だったのです。主語はいつも神さまです。あるいは宣教のイニシアチブを取っておられるのは神さまなのです。

第二朗読では4節の「最初のもの」を味わいましょう。死、悲しみ、嘆き、労苦らはすべて「最初のもの」に属しているのです。しかし、神さまが人の間に住む救いの時にはすべてが新しくされます。ですから3節の「人と共に住み」とは、新しい天と新しい地をもたらすために、神さまが自ら人々の間に住んでくださったことを指します。天の御父によるイエスさまのこの世への派遣はその前ぶれとなります。それで、5a節にある「見よ、わたしは万物を新しくする」という宣言の意味が明らかになります。神さまが新しいものとするこの世界は、二度と悪へと後戻りすることのない世界なのです。

福音朗読の冒頭の一節にある「栄光」（31 節）はわたしたちの信仰にとって大切なことばとなります。栄光はイエスさまと結びつきます。つまり、イエスさまの受難によって、神さまからは人の子であるイエスさまに栄光が与えられ、人の子からは神さまへと栄光が帰せられるからです。33 節の「あなたがたと共にいる」はイエスさまの気持ちを表しています。そして弟子たちが、イエスさまと共にいた体験こそが新しいエルサレムが現れる時に生じる神が人と共に住むことの保障となります。

最後に「あなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」（35 節）をここに明記しましょう。わたしたちが互いに愛し合う姿の中に、イエスさまの弟子としての生きる輝き、つまり栄光が現れます。わたしたちは道徳として人を愛するものではありません。イエスさまの輝き（栄光）を現すために愛するのです。イエスさまの栄光を現したとき、わたしたちは神さまの輝き（栄光）を現すものとなるのです。

それではまた来週